

## Rimse東京懇談会の2019年度調査の分析

小口 祐一

茨城大学教育学部教授・附属中学校長。1962年長野県生まれ。東北大学大学院教育学研究科博士課程修了，博士（教育学）。日本数学教育学会理事，日本教授学習心理学会理事，全国学力・学習状況調査問題作成委員・分析委員，長野県学力向上外部検証委員会委員，信州大学，埼玉大学等にて非常勤講師を歴任。

## 教員研修の観点から

2018年度調査と同様に，2019年度調査においても，校外の教員研修の実施主体は，主に教育委員会（47%）であった。研修の内容として書かれていた単語の出現回数を調べると，「授業」（22回），「理科」（19回），「実技」（15回）等が見られた。さらに，単語の共起傾向を分析すると，「授業」と「算数」，「理科」と「実技」，「体育」と「実技」には，強い共起傾向が見られた。校内の教員研修について，研修の内容として書かれていた単語の出現回数を調べると，「授業」（24回），「道徳」（23回），「研究授業」（12回）等が見られた。さらに，単語の共起傾向を分析すると，「授業」と「指導法」，「道徳」と「研究授業」，「道徳」と「評価」には，強い共起傾向が見られた。2018年度調査と同様に，2019年度調査においても，授業に基づいた研究が充実していた。2019年度調査の特徴として，「道徳」の授業や評価に焦点が当てられていたことが読み取れる。

## 校内環境の観点から

2019年度調査において，小学校における専科教員の配置有の割合は70%であり，2018年度調査より16ポイント程度大きかった。そのうち，当該の教科が専門の先生である割合が68%であった。

ICT教育対応のデジタル教材有の割合は69%であり，2018年度調査より14ポイント程度小さかった。そのうち，算数・数学のデジタル教材として，「デジタル教科書」を使用している割合が64.7%であった。理科のデジタル教材としては，「映像教材」を使用している割合が69.2%であり，教科による特徴が見られた。算数・数学では，図形の移動などの操作的活動でデジタル教科書が使用され，理科では，天体観測などの授業に役立つコンテンツとして映像教材が使用されたのではないだろうか。2019年度は，全国でギガ・スクール構想が実現される予定である。デジタル教科書を利用したコンテンツの開発を促進したり，ICTの教員研修を積極的に実施したりするなど，ソフト面の充実が一層大切になる。また，本年度は，遠隔授業のための授業コンテンツの作成及び動画配信が急速に進められた。今後は，優れた映像教材の共

有など，わが国の教育関係者が協力して，子どもたちの学習保障をしていくことが重要であると考えられる。

ユニバーサルデザインの取り組みについて，「学んだことをしっかり定着する教材提示」と「落ち着いて過ごせる教室」との間には，正の相関が見られた。同様に，「学んだことをしっかり定着する教材提示」と「全員が同じ課題に取り組める授業」，「学んだことをしっかり定着する教材提示」と「多様な考え方や意見が出てくる授業」の間にも，正の相関が見られた。一方，「学んだことをしっかり定着する教材提示」と「校内での先生方の連携」との間には，あまり相関が見られなかった。この結果の背景には，学習内容の定着のために，学級づくり，教室環境や授業の工夫が必要であるという先生方の意識が働いていると考えられる。

## 算数・数学の学習内容の観点から

授業で指導しにくいと感じる学習内容として，小学校算数では，二年生の「時間の単位」を選択した割合が大きかった。指導しにくい理由として，「図や言葉を使って説明しにくい」の割合が大きかった。デジタル化が進み，子どもたちに，時計の長針や短針の位置で時間の変化を動的に捉える経験が少なくなったことが要因の一つと考えられる。

中学校数学では，二年生の「証明の方法」を選択した割合が大きかった。指導しにくい理由として，「題材の場面設定がしにくい」の割合が大きかった。また，一年生の「ヒストグラム，相対度数，累積度数」を選択した割合が大きかった。指導しにくい理由として，「既習事項が身につけていない」の割合が大きかった。データの活用領域は，学習内容の増加，校種・学年間の移動が顕著であり，系統的な指導方法の構築など，校種を超えた研究が求められる。

新時代に対応した独自の視点として，「主体的・対話的で深い学びが実践できている学習内容」と「授業での指導のしにくさ」との関連を分析した。統計的に有意なものはみられなかったが，「ヒストグラム，相対度数，累積度数」には，ある程度の関連性が見込まれ，継続した調査が必要であろう。\*